

2026年度

J r Q 小 論 文

注 意

1. 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。鉛筆またはシャープペンシル・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
3. この問題冊子は4頁までとなっています。試験開始後、ただちに頁数を確認してください。
4. 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認してください。
5. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
7. この問題冊子とメモ用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、下記の問1・2に答えなさい。解答は解答用紙の所定欄に記しなさい。

かつて境界とは眼にみえ、手で触れることのできる、疑う余地のない自明なものと信じられていた。しかし、わたしたちの時代には、もはやあらゆる境界の自明性が喪われたようにみえる。境界が溶けてゆく時代、わたしたちの生の現場をそう名付けてもよい。

たとえば、生／死を分かち境界。ほんの十年か二十年足らず昔には、死の訪れはだれの眼にもあきらかな劇的な瞬間^{とぎ}であった。今は違う。病院の白い小部屋に横たわる肉身の死を、わたしたちはもはや、心臓に端子を結んだ機械の画像のなかの波が少しずつうねりを弱めつつ、一本の線と化す瞬間としてしか体験できない。死は機械が告知するもので、わたしたちが自身の眼で確認できる性質のものではなくなった。脳の死・心臓の停止・肉体の腐敗……、生／死を隔てる境界はどこにあるのか。

あるいは、男／女・大人／子供・夜／昼そして想像／現実……を分かち境界、いや、おそらくは境界という境界のすべてがいま曖昧に溶け去ろうとしている。異界ないし他界という、超越的な彼岸がわたしたちの日常の地平から根絶やしに逐われたとき、いっさいの境界が自明のものとして存在しつづけるための根拠もまた、潰^{つい}えてしまったのかもしれない。異界＝他界という、差異の絶対的な指標の喪われた場所では、境界はたえざる浮游状態のなかに宙吊りされている。

死後の世界がたしかな実在^{もの}として存在したとき、生／死はくっきり分節化されていた。現世／他界を往還することが可能であると信じられた古代、生／死を分かち繋げる境界は、黄泉比良坂^{よもつひらさか}とよばれた。坂が現世／他界を、生／死を仕切る境界であった。この坂（＝さかい）の向こう側に、死者たちの世界＝黄泉の国がひろがっていた。ひとたび死んだ者が息を吹きかえすことを、甦^{よみがえ}る＝黄泉帰ると称したのは、むろんそのためである。

『遠野物語』^{*}には、姥棄ての習俗が語られている。昔は六十を越えると、老人たちは村境にある蓮台野という小高い丘のうえへ追いやられた、という。村のはずれの蓮台野は、村落と、現世的な他界としてのダンノハナ（共同墓地）とをかぎる可視的な境界であった。老いが死後の世界＝他界へと、文字通りに陸続きに連なっていた、といってもよい。

わたしたちには死後の世界がない。死はひとつの生命体の終焉をしか意味しない。死者たちがおもむく浄土もなければ、堕ちてゆく地獄もない。生という第一楽章のあとにつづく、死後という名の第二楽章は存在しない。死はたんなる終止符にすぎず、それ以上であることも以下であることもともに禁じられてしまった。ここには、だから黄泉の国も黄泉比良坂もなく、蓮台野もダンノハナもない。此岸のかなたにあるのは、同じ貌をしたもう

ひとつの此岸であって、いかなる意味でも彼岸ではない。のっぺりと、どこまでも陰影なくひろがる均質化された空間が、ただ残される。もはや境界は存在しない。

あらゆる境界が喪われてゆく時代に、それゆえ、可視的な境界によって空間と時間を分節化する古さびた世界＝宇宙観が、やがて無効を宣告されようとしている時代に、境界論がひとつの有効な方法＝視座として、さまざまな知の領域で発見されつつある。これは疑いもなく一個の逆説である。しかし、そこには不透明な色合いはない。たぶん、知が志向する対象はその自明性が剥げ落ちてゆく時代にこそ、はじめて熱い関心を向けられる、知の眼差しの下に問題として浮上してくるものであるのだから。境界喪失の時代ゆえに、いま、境界論が前景に炙り出されてきているとかがえてよい。

(赤坂憲雄『境界の発生』による)

*民俗学者の柳田國男(1875-1962)が、1910年に発表した、岩手県遠野地方に伝わる民間伝承・信仰を集めた著作

問1. この文章は、かつての時代の「境界」をどのようなものとしてとらえているか。それは、今日どのように変化していると述べているか。これらの点について、文中のことばを使って100字前後でまとめなさい。

問2. ひとつの国際問題を取り上げて、それが、問題文の「境界」をめぐる状況と、どのように類似するか、また、異なるかという両面から500字前後で論じなさい。

【以下余白】